

## 使徒の働き7章 「いつも聖霊に逆らう人たち」

### 1A 父祖の信仰による歩み 1-8

### 2A 族長たちの妬み 9-16

### 3A 民が拒んだ解放者 17-37

#### 1B 約束の時 17-22

#### 2B イスラエルを顧みる思い 23-29

#### 3B もう一人の預言者 30-37

### 4A 偶像礼拝 38-50

#### 1B 金の子牛以降の歴史 38-43

#### 2B 建物の中に住まわれない方 44-50

### 5A 耳を閉ざした民 51-60

#### 1B 聖霊に逆らう先祖 51-53

#### 2B 天への召し 54-60

## 本文

使徒の働き7章を開いてください。ついに、話はエルサレムにおける教会の成長から、次に段階に入ります。それは、教会の中で、食卓に仕える七人を選んだところから始まります。ギリシア語を話すユダヤ人たちが選ばれましたが、その中でステパノ、そしてピリポが福音宣教で用いられることとなります。ステパノは、これから殉教します。その殉教によって、エルサレムの教会に対する弾圧が始まって、それで人々が散り散りになるのです。それが、異邦人への宣教のきっかけとなるのです。そしてピリポは、サマリア人への宣教を始めていきます。

これまで十二使徒による福音宣教が前面に出てきましたが、主は同じ聖霊によって、これら執事とされた者たちをも通して同じ働きをされます。これから見ていくステパノの説教は、使徒の働きの中で最も長いものです。一見、イスラエルの歴史を辿っているだけのように見えますが、実は、彼らの非難である、「[聖なる所と律法に逆らうことばを語る\(6:13\)](#)」に応えるものです。

7章は6章の続きになっています。ステパノが最高法院に引いて行かれました。そして、人々が偽の告発をします。しかし、15節を見てください、「最高法院で席に着いていた人々が、みなステパノに目を注ぐと、彼の顔は御使いのように見えた。」彼はおそらく、モーセが主と顔と顔を合わせて語っていたために、イスラエル人の前では顔が輝いていたのと似ていて、天を仰いでいるために、また、聖霊に満たされていたので、全き平安と喜びの中に置かれていたのだと思います。だからといって、彼が現実離れした人でないことを思い出してください。彼は食卓に仕える奉仕者の一

人でした。天を仰ぎ見ることは、日常の入用からかけ離れた人にはしません。むしろ、そういった日々の営みをしている人が、神の栄光、天の栄光を仰ぎ見るのです。

### 1A 父祖の信仰による歩み 1-8

<sup>1</sup>大祭司は、「そのとおりなのか」と尋ねた。<sup>2</sup>するとステパノは言った。「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。私たちの父アブラハムがハランに住む以前、まだメソポタミアにいたとき、栄光の神が彼に現れ、<sup>3</sup>『あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地へ行きなさい』と言われました。

ステパノは、大祭司の質問に対して、はい、いいえで答えず、主を証しする機会としました。聖なる所とモーセの律法に逆らうことばを語っているという告発ですが、被告としての弁明ではなく、むしろ、聖所と律法について、彼らの根本問題について指摘します。午前礼拝で話したように、「ルカ 21:13 それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。」と主が語られたとおりです。

ステパノは、「兄弟ならびに父である皆さん」と呼びかけています。兄弟とは同胞のユダヤ人たちのこと、父は最高法院、サンヘドリンの議員たちのことです。そうやって、自分はあなたがたと同じですよ、一つですよということを前もって語っています。評論家ではなく、当事者として、イスラエルにある霊的問題を提示するのです。

彼は、自分たちの父祖であるアブラハムから語り始めます。ここから、彼は優れた知恵をもって、彼らの告発に答えています。それは、アブラハムが聖所というところから大きく外れた、メソポタミア地方で、主なる神に栄光の神が現れたということです。そして、モーセによって律法が与えられるはるか以前に、神の約束があったということです。彼らがエルサレムの聖所、また律法だけに拘っていましたが、実は神は、はるかに壮大な計画を持っておられるということが分かります。

<sup>4</sup>そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。そして父の死後、神はそこから彼を、今あなたがたが住んでいるこの地に移されましたが、<sup>5</sup>ここでは、足の踏み場となる土地さえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。しかし神は、まだ子がいなかった彼に対して、この地を彼とその後の子孫に所有地として与えることを約束されました。

主は、アブラハムに「親族を離れて」と命じられていましたが、父テラと共にハランに来ました。そのため、父が死んでからようやく、主の示される地、約束の地に行くことが出来ました。父を敬うことは大事ですが、アブラハム自身が主なる神の召しに応えなければいけないのです。つまりは、信仰によって生きるのです。生きた信仰です。

そして、その信仰は、約束を手にしていないのに、それをはるかに見て死んでいったところに表

れていました。「ヘブ 11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」目に見えないところに神の真実があり、約束を信じるのが神の喜ばれることです。必ずしも、モーセの律法にまつわる慣習や聖所のことだけに留まらないのです。

<sup>6</sup> また、神は次のように言われました。『彼の子孫は他国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。』<sup>7</sup> また、神は言われました。『彼らが奴隷として仕えるその国民を、わたしはさばく。それから彼らは出て来て、この場所でわたしに仕えるようになる。』

ユダヤ人たちは、先祖たちを誇っていました。自分たちがアブラハムの子孫であることを誇り、ユダヤ人であればそのまま、神の国に入ると信じていました。異邦人は改宗してユダヤ教徒にならなければ、御国から外されて暗闇に投げ込まれる、地獄に行くと思っていたのです。そうした誇りがありますから、先祖たちが奴隷出身であったことは思わずに生きていたのです。

それが、分かるのは、ヨハネ 8 章におけるイエス様と彼らとの会話です。「8:32-33 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」奴隷であったことを、忘れているのです。これはまさに、神の恵みを忘れてしまった、選ばれた民の姿です。キリスト者も、そのままでは罪の奴隷で、滅んでしまうだけの者だったということを忘れて、神の恵みを忘れ、天に入るのは当然であるかのように思ったら、同じ過ちを犯します。

<sup>8</sup> そして、神はアブラハムに割礼の契約を与えられました。こうして、アブラハムはイサクを生み、八日目にその子に割礼を施しました。それからイサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長たちを生みました。

男子の性器の包皮を切ること、これが割礼ですが、神がアブラハムに契約の印として与えられました。そしてイサク、ヤコブを経て、イスラエル十二部族の族長たちが現れます。ここでユダヤ人たちは、割礼によって神との契約の民になり、神の国を相続する、すなわち救われると信じていました。けれども大事なものは、アブラハムがこれまで見てきた信仰の歩みをしてきたこと、神の声に信仰をもって応答してきたこと、御霊に導かれたこと、その信仰を受け継ぐ子孫として、割礼の契約を受けます。それはあくまでも、心にある包皮が切り取られて、神の御霊の声に敏感になり、聞き従うということ、目で見える形で表したのです。

ですから、モーセ自身がイスラエルの民に警告していました。申命記 10 章 16 節です、「あなた

がたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」ところが、その後のイスラエルの歴史が、心の割礼を受けていたのか定かではない。むしろ無割礼であったことが後の姿を見ると分かってきます。ステパノが、この説教の最後で、「7:51 うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。」という言葉につながります。これは、水のバプテスマ、洗礼でも同じことが言えるでしょう。バプテスマの儀式を受けることが大事ではありません。事実、自分が古い人に死に、キリストと共に新しい命ある生活を送っているかどうか大事なのです。

## **2A 族長たちの妬み 9-16**

<sup>9</sup> 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかし、神は彼とともにおられ、  
<sup>10</sup> あらゆる苦難から彼を救い出し、エジプト王ファラオの前で恵みと知恵を与えられたので、ファラオは彼をエジプトと王の全家を治める高官に任じました。

ヨセフの話に入ります。ヤコブの十二の息子のうちの一人です。ここで、この族長たちが、神の救いに用いられたヨセフを妬んだということが味噌です。これが、後に来られる方キリストへの妬みに重なります。ユダヤ人として来られたキリストは、同胞である宗教指導者たちから妬まれて、それで殺されました。

しかし、主がエジプトにおいて、共におられました。アブラハムにメソポタミア地方で栄光の神が現れてくださったように、イスラエルの地からはるかに外れたところで、神が現れてくださるのです。ですから、彼らが聖所だけに拘っているのを見透かしています。さらに、異邦人の王ファラオの前で恵みと知恵が与えられたことに言及しています。同じように、ローマの前でも、神は恵みと知恵を与えてくださるのです。しかしユダヤ人は反ローマ感情しかありませんでした。

<sup>11</sup> すると、エジプトとカナンの全地に飢饉が起こり、大きな苦難が襲って来たので、私たちの父祖たちは食べ物を手に入れることができなくなりました。<sup>12</sup> しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まず私たちの父祖たちを遣わしました。

飢饉のときに父祖たちは穀物のためにエジプトに下りますが、異邦人の王によって助けられています。先祖たちが、彼らが誇るように自立していたわけでもないのです。むしろ、神の恵みによって立っていることを知らないといけません。

<sup>13</sup> 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがファラオに明らかになりました。<sup>14</sup> そこで、ヨセフは人を遣わして、自分の父ヤコブと七十五人の親族全員を呼び寄せました。

ヨセフは、ヤコブの家を救うことも用いられます。そして、自分たちの父祖たちはそのことに気づく

のは、二度目に彼に会う時なのです。この「二度目」が大事です。彼らは、初めにヨセフを拒んだように、キリストとされたイエス様を拒みました。けれども、二度目に現れる時には彼らは認めます。イエス様が、神殿の敷地において彼らに対して、「禍だ」と八度、宣言されました。そして、彼らの家は荒れ果てたまま見捨てられることになることになると宣言し、しかし、こう言われました。「マタ 23:39 わたしはおまへたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまへたちが言う時が来るまで、決しておまへたちがわたしを見ることはない。」

彼らが悔い改めて、この方にメシアを称賛する言葉、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」という時が来るということです。ゼカリヤ書 12 章に、こうあります。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」

ところで、創世記ではエジプトに下ってきたヤコブの家族は 70 人となっていますが、ここでステパノは 75 人と言っています。これは矛盾しません、ヨセフの子は 5 人います。ステパノは、ヨセフの子はエジプトの子ではなく、ヤコブの家の者たちなのだということを強調しているにすぎません。

<sup>15</sup> こうして、ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。<sup>16</sup> 彼らはシェケムに運ばれ、かつてアブラハムがいくらかの銀でシェケムのハモルの子らから買っておいだした墓に、葬られました。

こちらでも、創世記の記述と表面的には違います。シェケムで買ったのはヤコブであり、葬られたのはヨセフだからです。ヤコブは、アブラハムがヘブロンで購入した畑地でサラのために墓を作ったのですが、アブラハム、イサクに並んで自分もそこで葬られました。けれども、この「彼ら」というのは、ヨセフと他の十一人の息子たちのことで、彼らもまたシェケムに運ばれて、そこで葬られたのでしょう。それから、アブラハムが買ったとありますが、それはヤコブが買ったけれども、父祖アブラハムを代表して買ったと言えます。

ところで、ここシェケムは、新約時代はあのサマリアの女の舞台、スカルのすぐそばの町です。サマリア人たちが住んでいます。ユダヤ人に対する誇りから、サマリア人を嫌っていたのですが、けれどもそこに自分たちの父祖の墓があるのです。そして、ピリポの宣べ伝える福音によって、サマリア人たちも、ユダヤ人のメシアを知るに至ります。

### **3A 民が拒んだ解放者 17-37**

#### **1B 約束の時 17-22**

<sup>17</sup> さて、神がアブラハムになされた約束の時が近づくにしたがい、民はエジプトで大いに数が増え、

<sup>18</sup> ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。<sup>19</sup> この王は、私たちの同胞に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。

「約束の時」というのは、アブラハムに対して神が言われた、エジプトを出ていく時のことです(6-7 節)。神は、民がエジプトへの愛着を自ら切るために、そして約束の地に向かわしめるために、ヨセフを知らない王が立つのを許されたともいえるでしょう。

<sup>20</sup> モーセが生まれたのは、このような時でした。彼は神の目にかなった、かわいい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、<sup>21</sup> ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。

ここで彼らが拘っているモーセ自身が現れました。ユダヤ人は、モーセの律法に関わる慣習に違反しているとステパノを責めていました。しかし、そのモーセをしても、神は、迫害しているファラオの娘をかえって、用いられているのです。彼らの憎んでいるローマにさえ、神の贖いの計画の一部にさえなっているとも言えるのです。

<sup>22</sup> モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。

興味深いことに、神の前では口下手と言っていました。「出 4:10 モーセは【主】に言った。「ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」それは 40 歳の時に、自分ができると思っていたの、イスラエルを救って、自分に与えられていた宮廷における力を使って、彼らを出させるということについて、その能力が何の役にも立たなかったからでしょう。自身の喪失感から、そう言ったと思われます。

## 2B イスラエルを顧みる思い 23-29

<sup>23</sup> モーセが四十歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。

彼は、幼い時に母から離れ、エジプトの宮廷におり、エジプトの学問を受けていましたが、それでも、同胞を顧みる心が起こされていました。これについて、ヘブル書 11 章で解説があります。「11:24-26 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」彼の神の民を顧みる思いは、キリストご自身がユダヤ人を

顧みる思いにつながっているのです。

<sup>24</sup> そして、同胞の一人が虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち殺して、ひどい目にあっていた人のために仕返しをしました。<sup>25</sup> モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。<sup>26</sup> 翌日、モーセは同胞たちが争っているところに現れ、和解させようとして言いました。『あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか。』<sup>27</sup> すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押し退けながら言いました。『だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。』<sup>28</sup> 昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか。』<sup>29</sup> このことばを聞いたモーセは逃げて、ミディアンの地で寄留者となり、そこで男の子を二人もうけました。

ここで大事なのは、「自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした」というところです。ヨセフの時と同じように、イスラエルの家を救う者として選ばれていたのに、イスラエル人たちが理解せず、退けたのです。父祖は、ヤコブの家を救う人を妬み退け、また、モーセが救う人であったのに、それを退けたのはイスラエル人なのです。

さらに、その結果として、ミディアンの地、異邦人の地に行きました。それと同じように、イエス様はユダヤ人に拒まれたので、救いがかえって異邦人の間に広がりました。ここにも、ヨセフと同じものがあり、ヨセフは異邦人の国エジプトで総理大臣になりました。

### 3B もう一人の預言者 30-37

<sup>30</sup> 四十年たったとき、シナイ山の荒野において、柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れました。<sup>31</sup> その光景を見たモーセは驚き、それをよく見ようとして近寄ったところ、主の御声が聞こえました。<sup>32</sup> 『わたしは、あなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』モーセは震え上がり、あえて見ようとはしませんでした。<sup>33</sup> すると、主は彼にこう言われました。『あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。<sup>34</sup> わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見た。また彼らのうめきを聞いた。だから、彼らを救い出すために下って来たのだ。今、行け。わたしは、あなたをエジプトに遣わす。』

ここでステパノは、「シナイの荒野が、そのまま聖なる地になっている」ということを言い表しています！エルサレムのヘロデの再建した神殿ではなく、遠く離れたシナイの荒野にある山で、そこがそのまま、アブラハム、イサク、ヤコブの神の現れるところ、聖なる地となったのです。

<sup>35</sup> 『だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は、柴の茂みの中で彼に現れた御使いの手によって、指導者また解放者として遣わされたので

す。<sup>36</sup>この人が人々を導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年の間荒野で、不思議とするしを行いました。

ヨセフと同じです。先祖たちが拒んだモーセを、主は解放者として定めておられました。モーセが再びイスラエル人の前に現れたら、その時に彼が預言者であることを認めました。同じように、ユダヤ人の宗教指導者たちが拒んだイエスが、再び彼らの前に現れたら、イスラエルはこの方が来るべきメシアであることを認めます。

<sup>37</sup> このモーセが、イスラエルの子らにこう言ったのです。『神は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。』

これが、申命記に書かれている、モーセが告げた言葉です。ユダヤ人には、いろいろな預言者が現れましたが、モーセのような預言者が現れる。彼に聞かないといけないと語りました。それこそが、イエスなのだということをステパノは伝えています。ペテロも、前の説教で伝えていました。

#### **4A 偶像礼拝 38-50**

##### **1B 金の子牛以降の歴史 38-43**

<sup>38</sup> また、モーセは、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの先祖たちとともに、荒野の集会にいて、私たちに与えるための生きたみことばを授かりました。<sup>39</sup>ところが私たちの先祖たちは、彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、<sup>40</sup> アロンに言いました。『われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き出した、あのモーセがどうなったのか、分からないから。』

民は、モーセを預言者と認めた後も、なおのこと彼の言うことに聞き従いませんでした。むしろ、神々を拝んだのです。偶像礼拝に戻っていったのです。それから、ステパノは、「荒野の集会」と呼びました。主が生きた御言葉を語られたのは、聖所の中ではなく、何もない荒野においてだったのです。

<sup>41</sup> 彼らの子牛を造ったのはそのころで、彼らはこの偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を楽しんでいました。<sup>42</sup>そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の万象に仕えるに任せられました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ。あなたがたは 荒野にいた四十年の間に、いけにえとささげ物を、わたしのところに携えて来たことがあったか。<sup>43</sup> あなたがたは、モレクの幕屋と神ライパンの星を担いでいた。それらは、あなたがたが拝むために造った像ではないか。わたしはあなたがたを、バビロンのかなたへ捕らえ移す。』

金の子牛を造ったイスラエルの姿は、その後も続きました。ヨシュアたちが約束の地に入って、



間もなくして、士師記を見れば、バアルやアシェルに従ったことが書いてあります。サムエルの時代、そしてダビデの時代は霊的復興が起りましたが、ソロモンの後に国が分裂し、北イスラエル王国はアッシリアへ、南ユダ王国はバビロンに捕え移されました。それらの直接原因は、やはり偶像礼拝でした。彼らは律法を持っていることを誇りにしていましたが、歴史を見たらかなり長いこと、その戒めの第一と第二、神以外のものを神々にして、形どって、偶像を造っていたのです。

ところで、ステパノはアモス書を引用しています。ここで、聖書を調べて開いたわけではありません。彼には、相当の聖書知識があったことが分かります。

## 2B 建物の中に住まわれない方 44-50

<sup>44</sup> 私たちの先祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりのものでした。<sup>45</sup> 私たちの先祖たちは、この幕屋を受け継いで、神が自分たちの前から追い払ってくださった異邦の民の所有地に、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ダビデの時代に至りました。

荒野に、「あかしの幕屋」がありました。つまり、神が生きておられることを証しされ、十戒の刻まれている契約の板がそこにありました。建物自体が、問題ではありませんでした。

<sup>46</sup> ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの家のために、幕屋のとどまる場所を求めました。

<sup>47</sup> そして、ソロモンが神のために家を建てました。

これまでアブラハム、ヨセフ、モーセと見てきました。アブラハムは、律法の前に生きたが、そこに神がおられました。ヨセフとモーセは、神に遣わされたのに先祖が拒みしました。そして今、彼らの王ダビデに話に移っています。その子ソロモンが神殿を建てました。

<sup>48</sup> しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。

<sup>49</sup> 『天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたは、わたしのために どのような家を建てようとするのか。—主のことば— わたしの安息の場所は、いったいどこにあるのか。<sup>50</sup> これらすべては、わたしの手が造ったものではないか。』

これは、神殿を建てたソロモン王自身が、神殿奉献式の時に祈っていたことです。「Ⅰ列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」それにもかかわらず、彼らは神の宮そのものに命をかけてしまいました。宮があるからそこに神がおられて、救いもあるのだと信じていたのです。けれども、イザヤが預言していました。主によって、天が王座、地は足台であり、神殿のような箱物の中に収めるような存在ではありません。たこと。エレミヤも預言

していました。「エレ 7:3-6 イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる。あなたがたの生き方と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの場所に住ませる。あなたがたは、「これは【主】の宮、【主】の宮、【主】の宮だ」という偽りのことばに信頼してはならない。」主のことばに聞き従っている中で初めて、主がそこに住まわれるのです。

ですから、そこに神の宮があるということだけで救いがあると信じるのは、アテネにあった偶像の宮と結局かわらないのではないか？木や石で作った偶像こそないが、建物に神を収められると考えていることで、すでにまことのイスラエルの神ではない、ということなのです。聖なる所に逆らっていると訴えていましたが、彼らこそが聖なる所を偶像のようにして、生ける神から離れてしまっているということなのです。

## **5A 耳を閉ざした民 51-60**

### **1B 聖霊に逆らう先祖 51-53**

<sup>51</sup> うなじを固くする、心と耳に割れを受けていない人たち。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。

ここが、ステパノがずっと言ってきたことです。あなたがたは自分たちの歴史と伝統を誇っているが、その先祖たちはずっと聖霊に逆らってきたのだ、ということです。ステパノは、「いつも」逆らっていると強調しています。ずっと良い人たちであったが、時に失敗があった。というようなものではなく、ずっと逆らってきたし、今もそうしていると言っています。

<sup>52</sup> あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が、だれかいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって告げた人たちを殺しましたが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

正しい方とは、イエスご自身のことです。預言者たちは、メシアを預言してそれで迫害されました、彼らはその子孫であります。しかし先祖たちよりも悪いのです。そのメシアご自身が来られたのに、この方を殺してしまったからです。

イエス様がこのことをマタイ 21 章で語られました。ぶどう園の農夫のことです。主人が収穫の分け前のためにしもべを遣わすも、農夫たちは袋叩きにして送り返します。息子なら敬ってくれるだろうと思ったら、息子ならば殺せば自分たちが相続財産を手に入れることができるとして殺してしまいます。そして 23 章では、ご自身だけでなく、ご自身を宣べ伝える者たちにも同じ仕打ちをすることを預言されました。「マタ 23:34-35 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラ

キヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。」アベルの時からずっと、あなたがたは流血の罪を犯してきたではないか、と責めておられ、これから実際にステパノに対しても行うのです。

<sup>53</sup> あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」

主が、御使いによってご自分を現わされたところを聖書ではずっと見ます。律法は、御使いにある神の栄光によって与えられている。シナイ山で黒雲や稲妻や雷、地震などが起こりますが、それは神の栄光が御使いたちと共に降りて来ているからです。黙示録を見れば御使いの働きがよく分かります。律法は確かに天からのものであり、聖なるものです。ところが、あなたがたこそが律法を守っていないと咎めているのです。

## 2B 天への召し 54-60

<sup>54</sup> 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ざしりしていた。

歯ざしりしていたというのは、ここでは襲いかかろうとして獲物を狙っている獣のそれに似ています。怒りが爆発する寸前です。

<sup>55</sup> しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、<sup>56</sup>「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。

なんという対照でしょうか！片や、怒りと憎悪に満ちているのに、もう一方は平安と喜びに満ちています。使徒の働きはまさに、聖霊のバプテスマ、あるいは聖霊の満たしの記録です。私たちはここで勇気を得たいです。どんなに憎悪に満ちた世に生きていても、その只中で聖霊の喜びと平安を持つことができるということです。

そして大事なのは、天をじっと見つめているステパノです。天の望みが、困難を耐える力を与えます。コロサイ書 3 章でパウロが勧めました。「3:1-4 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

<sup>57</sup> 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。

イエスが天に神の右の座におられるということを聞くや否や、彼らは一斉にステパノに向かいます。イエスがキリスト、メシアであることを語っている言葉で、イエスご自身がカヤパの前でこのことを語られ、神への冒涇だとしてカヤパは衣を裂き、死刑判決を出しました。その時も不法な手続きでしたが、ここもそうです、最高法院の判決を待たないで、騒ぎ、暴動の中で殺します。今でも、このようなことは世界各地で起こっています。特にイスラム教の国々や、インドのヒンズー教徒から、キリスト者たちがなぶり殺されます。それは狂気の沙汰です、地獄から出てきたような憎悪です。

<sup>58</sup> そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。

このような恐ろしい仕打ちを受けたのですから、ステパノの証しは徒労に終わった、逆効果だったのではないか？と思われるかもしれません。迫害を受けないように、このように話すべきではないとまでいう人たちもいるでしょう。しかし、神の前で正しい良心で、人々に告白することは、必ず証しを残すのです。ステパノは死に間際に、狂気に満ちた迫害者へと変貌するサウロ、後のパウロですが、彼に真理を植え付けました。彼はそれが真理であることを知っているからこそ、激しい迫害を加えました。しかし、彼が降参するのは時間の問題です。

<sup>59</sup> こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」<sup>60</sup> そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。

なんとすばらしい殉教でしょうか。彼は自分の主イエスが死なれた時のように、死んでいきました。自分の霊を主に任せて、迫害者らの罪を赦してくださいと祈っています。その祈りは聞かれません。パウロが、その大きな罪を赦されて、福音宣教者へと変えられるのです。

私たちは、殉教はしないかもしれませんが。けれども、自分に死にながら生きることによって、イエス様の命がこのように流れていく人生を送るように召されています。迫害者サウロは、後に自分自身が命が狙われる身となりました。けれども、こう言っています。「Ⅱコリ 4:10-11 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。」